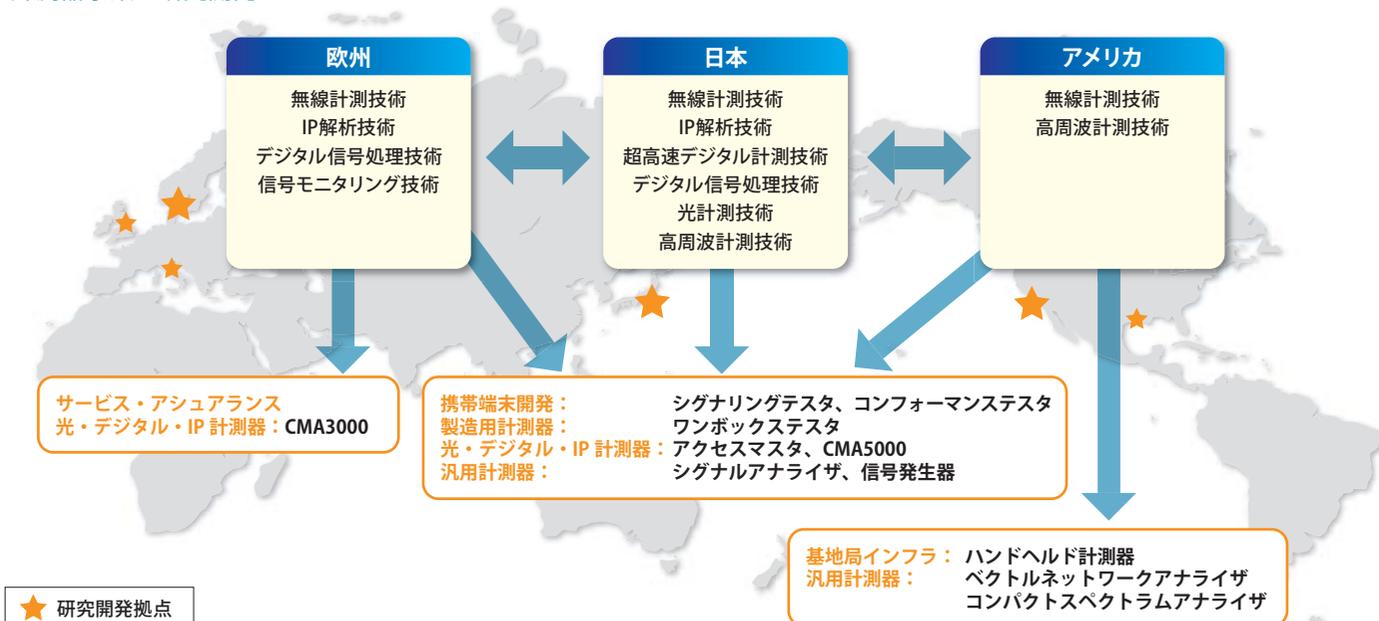


## 研究開発活動

次世代の先端技術を追求めるアンリツにとって、研究開発は競争優位性の源泉です。オリジナル&ハイレベルな技術をもとに、世界の主要な顧客に密着し、顧客のTTMを意識したソリューションを提供しています。

### 計測器事業の研究開発



### グローバルな研究開発体制

当社は、日本、アメリカ、ヨーロッパに開発拠点を有し、要素技術の活用と新技術の獲得・共有を実践しながら、グローバルに製品開発を行っています。計測器事業では、有線分野と無線分野に分かれていた日本の事業部制を2008年に廃止するとともに、基盤技術の研究開発を担っていたR&Dセンターと事業部の開発部門を統合しました。これにより研究開発リソースを集約し、開発効率を向上するとともに、来たるべき有線および無線通信の融合に対応しました。さらに2009年は、LTEなどの最先端計測と安定的な収益を実現する汎用計測の2グループに再編し、それぞれの市場や顧客ニーズを的確にとらえたソリューション開発を機動的に行っています。

### オリジナル&ハイレベルな技術・ノウハウ

当社は、無線計測技術、超高速デジタル計測技術、IP解析技術、光計測技術、高周波計測技術、デジタル信号処理技術、信号モニタリング技術、ネットワークトラフィック測定技術、帯域制御技術、異物検出技術など、さまざまな計測技術を保有しています。製品の差別化の源泉となるキーデバイスや基盤技術を独自に保有しており、その技術やノウハウを製品に展開して顧客のニーズにえています。2008年には、LTE携帯端末用チップセットの開発に不可欠な専用計測器シグナリングテストMD8430Aや、航空・宇宙やマイクロ波領域での電子デバイス開発などに使用する、汎用のベクトルネットワークアナライザMS464xシリーズなどの新製品を商品化しています。また、比重が高ま

るソフトウェア開発では、グローバルにグループ内外のリソースを有効活用し、効率的な開発を推進しています。

### 標準化活動への取り組み

研究開発活動の重要な取り組みのひとつが、標準化活動への参画です。アンリツは、国際的な標準化団体であるITU-T<sup>(注1)</sup>や3GPP次世代ネットワークフォーラムに加わり、通信規格の標準化に取り組んでいます。携帯電話システムにおいては、規格策定の最初の段階から参画しており、基地局と携帯端末の通信手順試験を可能とするコンフォーマンステスト(端末認証試験)の分野で、業界最多のテストケース承認数を取得した計測器を提供しています。この計測器の試験で合格した携帯端末は3GPP規格に適合することが認められることから、世界各国の携帯端末・チップセットメーカーに利用され、3G携帯電話システムの円滑な普及に貢献しています。

LTEにおいても同様の活動を続け、規格適合試験グループのサブチェアマンを務めており、日本やアメリカで2010年に予定されている商用サービス開始に向け、規格策定を推進しています。

また、有線通信システムにおいては、約20年前からITU-Tの活動に参加し、ジッタ・ワンダ<sup>(注2)</sup>測定技術の標準化活動を推進しています。この取り組みでは、10Gbit/s、40Gbit/sなどの光通信システムにおける測定技術を提案し、規格化されるなどの成果を上げています。

各標準化団体には、世界の情報通信産業をリードする企業が参画しています。当社は今後も、標準化活動への積極的な取り組みを通して培った顧客とのつながり、知識、技術を製品開発にフィードバックし、競争力に優れたソリューションをタイムリーに提供していきます。

注1: ITU-T  
(International Telecommunication Union Telecommunication Standardization Sector):

国際電気通信連合の部門のひとつで、通信分野の標準策定を行う。

注2: ジッタ・ワンダ  
(Jitter/Wander):

デジタルネットワークでは一定の間隔で信号が送られるが、伝送中に雑音などの影響を受けるため、受信した信号の間隔が揺らいでしまう現象のこと。一般的に揺らぎの周期が短いものをジッタ、周期が長くゆっくり揺らぐものをワンダと呼ぶ。

## 日本ITU協会から功績賞受賞

当社社員が、(財)日本ITU協会から「功績賞」を授与されました。日本ITU協会は、ITUの標準化活動に貢献した個人をITU協会賞として毎年表彰しています。功績賞は、この表彰制度において最高位の賞に位置付けられています。

当社社員は、光伝送システムおよびアクセスネットワークの測定器標準化グループでラポータ(議長役)を務め、NGNの構築に必要な標準規格づくりに貢献しています。こうした取り組みが評価され、今回の受賞となりました。

